

おわりに

矢作直樹

濁川孝志教授の主催により、このたび長堀優先生と不肖私を交えて「わが国、日本人とは」というテーマについて忌憚なく話し合わせていただきました。その中から、わが国の本来の在り方がやがて世界を愛と調和の方向に向かう道標となることを述べていただきました。

人が今あることを先祖に感謝し、自分が誰であることを知って矜持と志を持ち、子孫たちに故郷・国を引き継ぐ、という当たり前のがなされるよう願って今回の出版に携わらせていただきました。

さて、量子論の「観測問題」を持ち出すまでもなく、身の回りの世界は私たちの意識の

集合が作り上げるものです。昨今の天変地異も私たちの人心の現れです。

わが国は「天皇のしろしめす国」、つまり天皇を国民の要として皆が調和し相和して暮らすことを旨とする国でした。一方、今の世界は、「うしはく」、つまり統治者と統治される者たちとの力による二項対立の構造です。

米国主導で、第二次世界大戦の戦勝国が作った戦後体制の中で国連はじめ世界は動いてきました。わが国も国連のメンバーとして第二位となる分担金負担をしてきましたが、その国連は今でもわが国を「敵国条項（国際連合憲章第53条と第107条）」の対象国にしています。敵国条項とは、「日本が戦争を起こそうとしている」、と判断されただけで戦勝国側は、国連安保理の決議を経なくても日本を攻撃できるという条項です。つまり、世界はわが国が国連に参加して、「世界の平和と繁栄に貢献（外務省ホームページ）」してきて62年経っても構造的に待遇は変わりません。

米国は心底日本を怖れたので戦後、日本が再び立ち上がらないようGHQにより洗脳をかけ、これか思いのほか功を奏して今に至るまで解けず、わが国は独立することなく今まで米国の保護国として過ごしてきました。良し悪し以前に、「力こそ正義」の列強の中にあつては独立国でない「国」の信用はありません。

ただ、ここで時計の針をもどすことはもちろん、これからいわゆる「独立国」に戻るこ

とも現実的ではありません。すでにわが国と米国とは「結合双生児」の状態にあるからです。米国は外交軍事で日本を、日本は財務で米国を、支えることでお互いに存立できているので今さらただ離れることはできないでしょう。むしろ、米国をひいては世界を日本のような調和が幸せだと思えるように感化することが現実的でしょう。

わが国のこの国柄は、究極、世界が平和に向かって進化していくにあたり、ひとりわが国一国にとどまらず、やがて世界がわが国の国柄に近づくことが求められます。まさにそれが日本の役割く世界調和への羅針盤、です。

そのために私たち日本人はまず自分を知ることが先決です。今さら言うまでもありませんが、学校で教わる「歴史」は、世界の中でお付き合いしていく上で基本となる「戦勝国の史観」であることが明言されていません。多感な子どもにも、敗者であるわが国が勝者によって一方的に悪者と断罪された近現代史が盛り込まれ、そもそもわが国が縄文時代のような世界最古の優れた文明を持ち、その後統治体制の変遷を越えて「天皇のしらす国」であったという国柄を教えない歴史教育はいけません。

本来、子どもにわが国の「国史」をきちんと教え、先祖や母国に感謝の念と誇りを持つようにすることが歴史教育の基本ですが、残念ながら現状では、学校教育を是正するの

は極めて困難です。ましてや、子どもに二つの「歴史」があることを適切に理解させるのは、なお難しいでしょう。

国史については、すでに多くの方々がずっと以前から様々な取り組みをしてこられました。今さら自分たちが屋上屋を重ねる、ということにならないように心がけねばと考えました。今の時代は地球の曲がり角です。

今、それまで森羅万象の織りなすものが形而上学と形而下学とに分けて考えられてきたのが、量子論を敷衍することで同じ土俵で考えられるようになってきました。すべてはエネルギーであると。

濁川教授の的確な問題提起に従い、長堀先生と矢作が太古からの日本、日本人について思う所を自由に語らせていただきました。

我が国の先祖、とくに縄文の人たちはまさに靈性の人でした。中今に生き、高い文明を持ち、気の遠くなるほど長い年月にわたって平和に暮らした彼らの英知が今まさに注目されています。洋の東西を問わず靈性の時代から、理屈でものを考える学びをしてきたこの2500年を経て、私たちは理性と靈性とをそのバランスを取って生きる時代を迎えつつあります。

東日本大震災以後、あのような厳しい試練の経過で、誰に教わるともなく、現地の人々

がみせた高い精神性に裏付けられた行動に日本人だけでなく世界中の人々が心動かされたことは記憶に新しいことです。意識に刻まれた特質は消えるものではないことを教えられました。

日本人のこのような素晴らしい資質を思い出し、先人たちの軌跡を知れば必ずやよい方向に行くかと確信しています。そのために従来言われてきたことより少しばかり踏み込んだ部分もあるかと思えます。長堀先生は、現役医師としてするどい観察眼でお迎えまでの患者さんたちのこころの推移や「お迎え」そのときの様子を捉えて、「誰も心配せずとも状況を受容して従容として他界していく」ことを明快に述べられています。また、先生独自の行動力による古の日本の様々な実相についてもとてもよく掴んでいらつしゃいます。

今回の本で、私たちが読者の皆様に今という大切なときに生きる意義とすばらしさを感じとっていただき前に向いて生きていかれることにほんのわずかでも資することができたら望外の幸です。